

JAICOH ワークショップ 2001

「国際歯科保健医療協力の現場から」

報 告

日時:2001年7月1日(日)11:00 - 15:00

場所:ルビーホール11F

東京駅八重洲口 鉄道会館

参加人数:54名

プログラム

11:00 - 11:20	ワークショップ受付, 交流
11:20	開会および主旨説明
11:30 - 13:30	ワークショップ 2001「国際歯科保健医療協力の現場から」
13:30 - 15:00	参加者交流会(昼食立食形式), 参加者紹介など(個人, 団体)
15:00	閉会

ワークショップ 2001 では、トンガ、ブータン、ネパール、モンゴル、中国、カンボジア、フィリピン、ミャンマーなどで実際に NGO 活動を行っている歯科医師、歯科衛生士、歯科大学生、そして歯科が専門分野ではないが口腔保健を自分の活動の中に取り入れている方々の約 60 名が参加しました。深井穫博会長の進行で参加者全員が丸い円になり、活動のきっかけ、活動内容や体験について、活動を通して感じたこと、将来どのように国際協力に関わっていききたいか、などを参加型対話形式によってワークショップは進行了。ワークショップ後、鶴巻克雄先生の乾杯で、立食形式の交流会が始まり、小原真和理事の司会で参加者の自己紹介や報告がなされました。参加者からの主な発言は以下の通りです。

歯科医師(南太平洋医療隊所属)

これまで、バヌアツにおいて活動を行ってきたが、今年からトンガでの活動に移った。トンガでの歯科治療は、抜歯が多く、その抜歯に関しては、トンガ歯科医師の方の技術は高い。今年は私たちの活動に若い歯科大学生が参加することがとてもうれしい。

歯科医師(歯科大学勤務)

これまでカンボジアをフィールドとして活動し、ほとんどは一人で現地に行き、個人的な活動が中心となっている。毎回、現地の大学で歯周病の講義をしている。始めは、教授からの命令で「行かされた」といった感じだったが、いざ講義を始めると現地の先生が大変熱心に聴いてくれ、日本との違いに驚きと感動を覚えた。現地の先生と 96 年の秋から検診と予防処置の活動を始めている。活動は継続しなければならないということを感じている。

歯科医師(日本口唇口蓋裂協会所属)

アメリカの CPJ に参加したのが、きっかけで、年間の準備期間を経て 92 年から日本唇顎口蓋裂協会を発足させた。108 の団体会員と 2200 名の個人会員からなる組織である。現在は約 20 カ国で活動しており、大学の教員が中心となっている。また、環境庁、建設省などの支援を受けている。技術移転ばかりではなく、術後の患者さんのケアということにも力を入れている。どうしても資金面が弱いという弱点を克服するため、

まず、大企業の役員さんからフレームワークを作るという手法を取り入れた。

現在の JAICOH はフィールドをもった活動をせず、ネットワーク作りにシフトした。これは大変な決断であり、評価に値することだと思う。そんな深井会長のご意思に賛同して協力させていただいている。ちょうど今の JAICOH と同じような医療援助団体のネットワーク作りをする団体の事務局長を現在務めさせていただいています。海外へ勝手に行って好き勝手に活動することはよくないことです。そこで、2000 年にガイドラインを作った。

女性(福岡在住)

現在はフリーターやっている。親が歯科医師ということもあり、歯科における海外での活動に興味があった。識字率の低い国の人たちにトイレや歯みがきの重要性を教える衛生関係の小劇をやってほしいという要望があり、ラオス、カンボジアの約 20 の小学校へ訪問し、ぬいぐるみにて約 30 分かけてぬいぐるみショーを行った経験がある。視覚や聴覚での印象はとても重要であり、記憶に残るものである。たまたま東歯大のミャンマー・スタディー・ツアーの募集を見つけ、参加させていただくことになった。諸事情により、結局ミャンマーに行くことはできなかったが、事前の勉強会や新しい仲間ができたことは貴重な体験だった。次回は現地に行き、私の経験を発揮したいと思う。また、素人の視点というものも大切にしていきたいと思う。

歯科医師(歯科大学勤務)

最初のきっかけは東歯大のスタディーツアーだった。前々から興味があったが大学にそのような団体がなく、なにもきっかけを持ってないまま過していた。ミャンマーに関して始めは軍事政権という偏見以外何も知識がなかった。しかし、大学の先生と開業医を兼ねて非常に忙しいにも関わらず、いろいろと協力してくれたことに今でも感動している。JAICOH でのミャンマーの活動は一つの区切りをつけた。しかし、ミャンマーからの要望が多くある個人的でもないので、継続していきたいと常々考えている。

学生(歯科大学 4 年生)

今年、国際保健研究会という学生サークルが当大学でも発足した。途上国の歯科事情を把握することに重点をおき、2 月にカンボジアにスタディー・ツアーを実施した。今年の夏にもカンボジアに行く予定にしている。と同時に、他のメンバーが時田先生といっしょにトンガへ行くことになった。今は、学生だからできることは何かを問い、それを続けていこうと考えている。また、壁にもぶつかっている。大学だけの活動では限界があるのではないかと、横のつながりが難しい、活動資金がない、グランド探しが難航している、継続させることが難しい、発足したものの今後どうなるであろうかなど、悩みは尽きない。価値観はそれぞれ違いますが、それぞれ尊重し合いがなばっていくつもりである。

歯科医師(ネパール歯科医療協会所属)

学生時代より国際協力に興味があったが、まわりに学生も参加できるような団体がなかった。個人で試行錯誤の中で学会に参加したり、国際協力をやっている先生にお会いしたりしていた。大学の研修医時代にネパール歯科医療協会の活動に参加し、その活動を通して、歯科だけではなく公衆衛生を学ぶ必要があると考え、国立公衆衛生院にて国際保健学の勉強をした。今年は JICA の唯一の歯科のプロジェクト(スリランカ)を見学したり、母子保健の NGO に参加したり、また、JICA の技術協力専門家養成研修(PHC コース)を受講し、トータルヘルスの中での「歯科」であったり他の分野と協力して行う国際協力を考えていきたいと思っている。ここに参加している学生さんには、せっかくこのような集まりがあるので、諸先輩方にたくさん学んで欲しいと思う。

歯科医師(千葉県開業)

以前はロータリークラブにおいて、援助活動を行っていたが、金銭的な援助が多く、そのやり方に疑問を常々持っていた。6 年前に中村修一先生(ネパール歯科医療協会)とお知り合いになり、3 度ほど、ネパールへ行ってきた。そのネパールでの活動により、ロータリークラブの活動を変えたいと考えている。今は、ロータリークラブの同額補助という制度を利用して、プノンペンに学校を作っていて、そこに、検診を取り入れようと思っている。

歯科医師(歯科大学大学院 1 年生)

私のぼんやりした海外への羨望が実際の活動につながったきっかけは、東京歯科大学の眞木先生の講義だった。それから、JAICOH を知り今までお世話になっている。大学に国際保健関係のサークルがなく、情報収集等で困った個人的な経験から学内に学生サークルを設立した。また、医学生と交流することで歯科における活動がいかに遅れているかを知り、歯科学生全体の底上げを図らなければならないと考えるようになった。最近、同じようなサークルが各大学で発足していることは、本当にうれしい。もっと活発に活動していき、歯科の存在を示していきたいと思っている。

歯科医師(北海道ブータン協会所属)

平成 3 年から青年海外協力隊員として短期緊急派遣で、一年間ブータンへ行っていた。北海道大学口腔外科に所属する傍ら、口腔衛生学会にて学会発表もした。JICOH の存在をそこで知った。実際、情報を収集する場がなく、その当時は、一人で悩んでいた。そんな経験から、歯科関係者の青年海外協力隊の連絡網を作ってみようと思った。何をやりたいのか、何をを知りたいのかを探するのに役立てばいいなと思っている。

某教授から学生へのアドバイスを頼まれたが、自分でできることは限られており、「振り分け」という役割でも十分活躍できるのではないかということに気づいた。今の学生さんと接して、昔と格段に雰囲気が変わってきている。彼らのためにも何かできることを探していこうと思っている。

歯科医師(東京都開業)

たまたま、歯科新聞で知って来ました。「歯科」での活動が実際どのようなものであるか知りませんでした。実際の活動に参加してみたいと思っています。

学生(歯科大学4年生)

子供の3人がおり、ある程度大きくなったところで、社会に対してなにかできることがあるか考え、歯科大学に進学した。海外での活動に興味があるのもその一環。インドの北西部にゆかりがあり、そこで活動できたらいいなと思っている。

歯科衛生士(宮城県勤務)

歯科衛生士という職業を活用した活動をしたいと思っていた折、ネパールに鉛筆を送る会を知り、いろいろと関わるようになりました。日本でのNGOをどのようにやっていけばいいのか？日本でいらなくなったものを送っていいのか？と考えるようになった。

歯科衛生士(東京都保健所勤務)

「若い頃、無歯科医村での活動に興味をもったのが、そもそものきっかけだと思う。学生時代は長崎大学の教授をされていた若き日の高木先生と岩手県の衣川というところで活動をしていた。職場での理解を得られなかったこともあり、このような活動ができなかったが、その後、ネパールへ村居先生と中村先生と行く機会があり、それがまた国際協力活動を始めるきっかけとなった。そこで感じたことは、「歯」「口腔」だけをみてはいけないということだ。現地の人は自分たちを貧しいと思っていないし、可哀相だと思っていない。情報をどのように得るかが問題だと思う。また、日本には様々なNGOが、どこに所属してもいいと思う。でも、そこにはそのルールがあるので、それに従うべき。今度、インドネシアにて新しい活動を開始することになった。若い人にもいっぱい参加して欲しいと思う。

歯科医師(東京都開業)

7月1日から老人保健法の適用となったが、気持ちは若い人と同じである。私のポリシーとしては、こちらから助けに行かない。押しつけはしない。しかし、先方からの依頼があれば、私のできる範囲で協力させていただくことにしている。国際交流関係のお手伝いをすることが多く、毎年スリランカへ行っている。きっかけは、FDI日本大会で来た先生と知り合いになったことから、斑状歯の問題を解決して欲しいとの協力要請があったからである。そして、私なりのお手伝いをさせていただき、今は国レベルまでのプロジェクトになった。主役は常に相手国や先方の人々にあり、個人としての現地での協力活動は終了した。

歯科医師(歯科大学勤務、ネパール歯科医療協力会所属)

JAICOHには最初から参加していた。この10年間いろいろなことがありましたが、深井会長になってから、みんな仲良くしようという雰囲気になったと思う。私は、プロジェクトでやっていくことが大切だと考えているので、スタディー・ツアーという形ではやりたくない。今の悩みは、国際保健をやるにはいくつかの戦略があるが、これまで現地の人々へのenableを行ってきた。今後これをmediateにするにはどうしたらいいのかということである。この二つには大きな溝がある。そこで、今考えているのは、自然体でやる方がいいのではないのかということです。目標のない活動がなくてもいいのではないのか。そんなことを最近考えている。

歯科衛生士(東京都勤務)

歯科衛生士になって4年目です。自分の中で、ゆとりができたので参加してみた。「デンタルハイジーン」での歯科衛生士さんの活躍をみると私もやってみたいと考えるようになった。自分のできることを探してみたいと思っている。

学生(歯科大学3年生)

歯科保健医療への興味をもったきっかけは、入学当初の眞木助教授の授業と、当時東歯大6年であった阿部先生の影響である。昨年末に、JAICOHに支援していただき、東京歯科大学国際医療研究会主催のミャンマー・スタディー・ツアーを企画して、その代表を務めた。日頃は、国際保健学生フォーラムという学生団体の中で、勉強会をひらき、国際保健について学び、見聞を広げている。昨今は、スタディー・ツアーの意義について考え、国家資格を与えられた医療人ではなく学生として最大限出来ることについて悩んでいる。今後は、多くの歯科学生に国際保健を広め、学生間でのネットワークづくりに努めていきたいと思う。

女性(マスコミ)

日本歯科新聞の記者をしています。大学の学生時代に国際学部でした。学生時代よりホームレスの支援をしていた。NGOなどが介入することで、現地の生活が変化します。それらは、よいことであると思ってのことである。しかし、彼らは今の生活に満足している。そして、彼らの生活の変化が果たしてよいことなのかどうなのかの評価があまりされていないように思う。

以上